

Title	伊東一信氏のご逝去を悼んで
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	デザイン理論. 2006, 48, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53127
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

伊東一信氏のご逝去を悼んで

藤田 治彦

意匠学会第3代会長、京都教育大学名誉教授伊東一信氏は、2006年4月26日午後他界された。9年前に病に倒れ、以来ご病床にあられた。音楽学を専門にされているご息子が私の同僚で、ある程度そのご様子は存じ上げていたが、お見舞いにかかろうともできずにいるうちに訃報に接することになってしまった。とはいっても、享年87歳、ご長命であられた。

「温厚な」という言葉はこの方のためにある、という感じの伊東先生であった。学会の大会や例会で、あるいは懇親の席などで、いつもにこやかに微笑みながら、物静かにご挨拶されていたお姿が目につかふ。伊東先生と親しくお話させていただくようになったのは、もう京都教育大学ご退官近くのことだったと思うが、大学の教師としても、さぞかし優しく穏やかな先生であられたことだろうと想像される。

意匠学会の学会誌に次のような文章を、会員として、また会長として寄せられているので、バックナンバーをお持ちの方は、伊東先生を偲んでご覧いただければと思う。「デザイン教育の諸問題」（『デザイン理論』第9号）、「京都駅のマーク及びサイン計画試案」（『デザイン理論』第16号）、「100回記念例会」（『デザイン理論』第23号）、「30年の遍歴」（『デザイン理論』第27号）、「そして、「金田民夫氏を悼む」（『デザイン理論』第30号）である。「構成」あるいは「壁面構成」を中心としたデザイン教育に捧げられた生涯であった。

なかでも「30年の遍歴」を拜読すると、伊東先生は、これまでの意匠学会で唯一のアーティスト会長、デザイナー会長であったことが実感される。そこでは、次のように、ご自分の作品の変遷を振り返られている。「分割による構成」から「オートマティズム」へ、さらに「曲線的な形態」から「直線的な形態」を経て、再び、「曲線的形態」へ、そして、「直線・曲線併用の形態」へという変貌である。ただし変貌とはいっても、その作品には、健やかなモダニズムとでもいうべきおおらかさが、初期から後期まで終始一貫して流れていたように思われる。「30年の遍歴」は次のように結ばれている。

「私はモダニズムの中で育った。私が30年の間に制作してきたデザインは終始モダニズムの作品である。近年、ポストモダニズムの風潮があるが、私にはこれに転向しようという気持ちはない。モダニズムをもっと徹底的に追求してみたいからである。」

会員の皆さまとともに、モダニスト元会長——いうまでもなく見かけのモダニストではなく心のモダニストであられた——伊東一信先生のご冥福をお祈りしたい。